

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-2

アズ・タイム・ゴーズ・バイ
作詞／作曲 ハーマン・フップフェルド
歌手／ドーリー・ウイルソン

このことをぜひ思い出しておくれ。
キスはキスで、
溜息は溜息。
基本的なことは同じ……時が過ぎても。
そして恋人たちが愛し合えば、今でも
「愛している」という……
君もそうすればいい、
将来何が起きようとも……
時が過ぎても。

「今晚は」と真紀。

「やあ、」と横田。

ヒデコは風のように席を外す。

「シャンパンを……」

「ご無理なさらさないで。ジントニックのおかわりを頼みましょう」と真紀は横田の様子をみながら言った。

「私も地に落ちたものだ。しかし、そう言わせてしまうのも、私のせいか……」と横田は奥行きのない目をして自問自答した。

「ごめんなさい。すぐにシャンパンをお持ちします」

「……、ありがとう。それでは、凄腕の女性バーテンダーにシャンパン・カクテルを二杯作ってもらおうことでお相子としようじゃないか」と横田は浮かれ口調で言った。

「マティーニをいただいてよろしいですか」

真紀は半ば意図的に聞くと、横田の返事を待たずに黒服を呼んだ。

真紀が自分の店でマティーニを頼むのも飲むのも初めてだった。

バーテンダーの菜々緒が作るマティーニと行きつけのバーの老バーテンダーが作るマティーニを飲み分ける機会を持たせてくれたのも横田のお陰だと思えば、年の暮れの多忙な時期に物分かりの悪い男を前にしてまで、店の隅々まで神経を尖らせて俯瞰的に見ている真紀ではあったが、なぜか自然と口元がほころんだ。

カウンター席は立て込んでいたので、黒服に頼んでも構わなかったが、菜々緒はカクテルをトレイに乗せて運んできた。

「ママがマティーニを飲まれるなんて、意外でした。エクストラ・ドライで作りましたけれど……」と菜々緒は心配そうに言ってカクテルグラスとシャンパングラスをテーブルに置いた。

「私のも、緊張感を持って作ってくれたらどうね？」と横田がふざけた顔で言った。

二人の危なっかしい空気を感じ取った菜々緒は、ニコリともしないで黙って頷いた。